

短大特任教員教育研究業績書

平成 30 年 5 月 7 日

氏名	ふりがな	所属	職 位	性別
風間 みどり	かざま みどり	保育学科 通信教育課程	教授・ <u>准教授</u> ・講師・ 助教	男・ <u>女</u>

担 当 科 目 名

保育の心理学Ⅰ 保育の心理学Ⅱ

学 歴

和暦(西暦)年 月	事 項	学位
平成 12(2000)年 4 月	慶應義塾大学通信教育部学士入学	
平成 17(2005)年 3 月	同 卒業	学士(人間関係学)
平成 17(2005)年 4 月	東京女子大学大学院修士課程現代文化研究科入学	
平成 19(2007)年 3 月	同 修了	修士(学術)
平成 19(2007)年 4 月	東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科入学	
平成 27(2015)年 9 月	同 修了	博士(生涯人間科学)

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容
東京女子大学現代教養学部人間 科学科非常勤講師	2015 年 9 月 ～2017 年 3 月	学部生対象講義・実習「コミュニケーション研究法入 門：質的研究法」
同	2016 年 4 月 ～2016 年 9 月	コミュニケーション学科学部生対象「2 年次演習」
同	2016 年 4 月 ～現在に至る	学部生対象講義・実習「コミュニケーション研究法実習 (内容分析)」
同	2017 年 9 月 ～2018 年 3 月	学部生対象講義「教育心理学」(教職課程科目)
日本社会事業大学社会福祉学部 非常勤講師	2016 年 4 月 ～現在に至る	学部生対象講義「発達心理学Ⅱ」(教職課程科目)
白梅学園大学大学院子ども学研 究科非常勤講師(修士課程)	2017 年 4 月 ～2017 年 9 月	「認知発達研究」(臨床発達心理士指定科目) 非常勤講 師
東京女子大学特任研究員 (専任)	2016 年 4 月 ～2018 年 3 月	子どもの他者理解、感情制御についての心理・生理・文 化的要因からの検討
小田原短期大学	2018 年 4 月 ～現在に至る	保育学科通信教育課程 准教授

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
日本発達心理学会	2006 年 2 月～現在	日本発達心理学会会員
日本社会心理学会	2006 年 3 月～現在	日本社会心理学会会員
日本心理学会	2006 年 4 月～現在	日本心理学会会員
日本教育心理学会	2007 年 12 月～現在	日本教育心理学会会員

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
石神井・冒険遊びの会	2004 年 10 月 ～2013 年 3 月	石神井・冒険遊びの会(子育て活動プレイパーク主宰) 世 話人

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
小学校教諭1級普通免許状	1989 年 3 月	東京都
幼稚園教諭1級普通免許状	1989 年 3 月	東京都

研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文) 日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解：日米比較からの検	共著, 風間みどり・平林秀美・唐澤真弓・Tardif, Twila・Olson, Sheryl	2013年6月	発達心理学研究第24巻第2号, 126-138.	日米の幼児とその母親を対象に、実験と質問紙調査を実施し、日本の母親はアメリカの母親に比べて、あいまいな養育態度が多いことを示した。さらに日本では、母親のあいまいな養育態度が多いほど、子どもの心の理論と他者感情理解の成績が低いこと、励ます養育態度は多いほど、子どもの心の理論の成績が高いことが見出された。一方アメリカでは、子どもの他者理解と母親の養育態度との間に関連が示されなかった。結果から、日本の母親の言語的に明確な働きかけの少ないあいまいな養育態度は、4歳の子どもの他者理解の発達を促進し難い可能性を指摘した。(査読有、発達心理学第24回学会賞受賞論文)
感情制御の社会化プロセス—文化間要因と個人間要因の交差的研究—	共著, 平林秀美, 唐澤真弓, 風間みどり	2009年5月	平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(c)研究成果報告書	感情制御の関連要因について、心の理論、他者感情理解、実行機能、についての比較文化研究を行った。日本の子どもはアメリカの子どもに比べて心の理論の獲得が遅く、それは、Knowledge Access と Content False Belief 課題の得点が低いためであった。
子どもの本にみる文化的スクリプト	共著, 風間みどり・唐澤真弓	2007年8月	発達研究, 第21巻, 19-27	文化・社会の中で人の行動の捉え方に注目し、日米の児童書各40冊について、主人公を取り巻く状況や他者への対処行動に関して、内容分析を行った。日本の児童書では、主人公は、周囲の状況や他者の言動を、自分の行動を阻止する方向であっても受け入れる行動が多く描かれていたのに対し、米国の児童書では、主人公は、受け入れない行動が多く描写されていた。日本の児童書には、他者や状況に合わせて行動するという、適応型対処行動のスクリプトがあり、アメリカの児童書には、自分の意思を強く持つコントロール型対処行動のスクリプトが存在していたと考えられる。(査読有)
(その他) 見守るしつけと子どもの感情制御—縦断研究からの検討	共同, 風間みどり・平林秀美・唐澤真弓	2017年9月	日本教育心理学会第59回総会	幼児期における親の見守るしつけは、児童期の子どもの攻撃行動と負の関連傾向を示し、見守るしつけは、児童期以降の子どもの発達にとって、必ずしもネガティブな意味をもつものではないことが示唆された。さらに、気質との関連では、子どもの衝動性の高さは攻撃行動の高さと関連し、アメリカの子どもでの研究(Olson et al., 2005)と同様の結果を示した。
感情制御場面のコルチゾール分泌量と心理的要因の文化差—日米中データからの検討	共同, 風間みどり・平林秀美・Tardif, Twila・Wang, Li・唐澤真弓	2017年3月	日本発達心理学会第28回大会	心理的要因と生理的反応との関連の文化差を指摘した研究(Grabell et al., 2014)を踏まえ、心理的要因に日本の子どもの文化的発達課題である他者感情理解がコルチゾール分泌量に影響を与える可能性を検討とした。対人葛藤、自己能力課題とも、日本では他者感情理解が高いほどコルチゾール分泌増加量が少ないが、同一変数を投入した米中のデータではそのような傾向は示されなかった。アメリカだけでなく中国とも異なり、日本では他者感情理解が感情制御の生理反応の予測因と考えられることを指摘した。
Cultural moderates physiological responses to	共同, Mayumi Karasawa, Midori Kazama, & Hidemi Hirabayashi	2016年7月	24th Biennial Meeting of the International Society for the Study	日本の子どもの感情制御場面における生理的ストレス反応と関連要因について文化比較から分析した結果、日本の子どものコルチゾール分泌増加量は気質の注意の焦点化と関連があるのに対し、アメリカの子どもで

<p>emotional stress in Japanese preschool-aged children</p> <p>Cortisol reactivity and actual behavior to emotional challenging task in Japanese preschoolers.</p> <p>Children's Emotion Regulation and Behavioral and Physiological Cortisol Response in Prize Task</p> <p>子どもの生理的ストレスと睡眠の問題、行動特性との関連：日米比較からの検討</p>	<p>共同, Midori Kazama, Hidemi Hirabayashi, & Mayumi Karasawa</p> <p>共同, Hidemi Hirabayashi, Midori Kazama, & Mayumi Karasawa</p> <p>共同, 風間みどり・平林秀美・Tardif, Twila・唐澤真弓</p>	<p>2016年7月</p> <p>2016年5月</p> <p>2016年4月</p>	<p>of Behavioural Development, Vilnius, Lithuania</p> <p>31th International Congress of Psychology, Yokohama</p> <p>25th APS annual Convention, Chicago</p> <p>日本発達心理学会第27回大会, 北海道大学</p>	<p>は気質の抑制的制御を関連が示され文化で異なることが見出された。(シンポジウムでの口頭発表, 査読有, 担当【方法】【結果】)</p> <p>ゲームに失敗するという自己能力葛藤場面における幼児感情制御について, 実際の行動と生理的反応との関連を日米比較から検討した。日本の子どもは, アメリカの子どもに比べて, ゲームに失敗した後のコルチゾール分泌増加量が大きいことが示された。さらに, 日本の泣いている子どもでじっとしている子どもは, アメリカの泣いている子どもでじっとしている子どもに比べると有意にコルチゾール分泌増加量が大きいことが示された。結果から, 感情制御における実際の行動と生理的反応の関連には日米で異なることが示唆された。</p> <p>対人葛藤課題を実施しコルチゾール分泌量を測定し, 課題実施後の10分から50分までの分泌増加量AUCi10-50を算出した。課題実施中の子どもの行動を観察し足を動かすか動かないかを測定した。行動的側面で足を動かす子どもは, 動かない子どもに比べてコルチゾール分泌増加量が低いことが示された。子どもの行動は, 生理的ストレス反応やネガティブな感情とは別の反応を示すことが見出された。</p> <p>日常の生理的ストレスを示すコルチゾール分泌量を従属変数として, 子ども自身の睡眠の問題, 行動特性との関連について日米比較から検討した。その結果, 日本の子どもでは, いびきが大きいと生理的ストレスは高いが, 行動特性は生理的ストレスと関連を示さなかった。一方アメリカの子どもでは, 攻撃行動が高いと生理的ストレスは高いが, 睡眠の問題は生理的ストレスと関連を示さなかった。結果から, 日本の子どもの精神的健康は, いびきなどの睡眠の問題によって予測され, アメリカの子どもの精神的健康は, 攻撃行動といった子ども自身のもつ行動特性によって予測されることが示された。</p>
<p>その他 (表彰等)</p> <p>日本発達心理学会第24回学会賞受賞</p> <p>研究代表者</p> <p>研究分担者</p>	<p>2015年3月</p> <p>2016年8月～現在に至る</p> <p>2017年4月～現在に至る</p>	<p>日本発達心理学会第24回学会賞受賞(「日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解：日米比較からの検討」, 共著：風間みどり・平林秀美・唐澤真弓・Tardif, Twila・Olson, Sherl)</p> <p>平成28年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究活動スタート支援「見守る」しつけと児童期の子どもの他者理解, 感情制御の発達</p> <p>平成29年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)基盤研究(B)社会適応方略としての感情制御プロセス-日米比較における複層レベルの検討-研究代表者平林秀美</p>		